TADOKU JUNIOR　ピノッキオの冒険　★★★☆☆ ふつう　783語

Pinocchio, Chapter 11

第11章　くしゃみをする火食い親方

Carlo Collodi (tr. Carol Della Chiesa, 1909)（1883年の本）　原文そのまま　朗読：Mark F. Smith

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　こわい火食い親方には、悲しくなるとくしゃみが出るふしぎなくせがありました。助かったピノッキオでしたが、今度は友だちが火にくべられそうになり……。



Fire Eater sneezes and forgives Pinocchio, who saves his friend, Harlequin, from death.

In the theater, great excitement reigned.

Fire Eater (this was really his name) was very ugly, but he was far from being as bad as he looked. Proof of this is that, when he saw the poor Marionette being brought in to him, struggling with fear and crying, “I don’t want to die! I don’t want to die!” he felt sorry for him and began first to waver and then to weaken. Finally, he could control himself no longer and gave a loud sneeze.

At that sneeze, Harlequin, who until then had been as sad as a weeping willow, smiled happily and leaning toward the Marionette, whispered to him:

“Good news, brother mine! Fire Eater has sneezed and this is a sign that he feels sorry for you. You are saved!”

For be it known, that, while other people, when sad and sorrowful, weep and wipe their eyes, Fire Eater, on the other hand, had the strange habit of sneezing each time he felt unhappy. The way was just as good as any other to show the kindness of his heart.

After sneezing, Fire Eater, ugly as ever, cried to Pinocchio:

“Stop crying! Your wails give me a funny feeling down here in my stomach and—E—tchee!—E—tchee!” Two loud sneezes finished his speech.

“God bless you!” said Pinocchio.

“Thanks! Are your father and mother still living?” demanded Fire Eater.

“My father, yes. My mother I have never known.”

“Your poor father would suffer terribly if I were to use you as firewood. Poor old man! I feel sorry for him! E—tchee! E—tchee! E—tchee!” Three more sneezes sounded, louder than ever.

“God bless you!” said Pinocchio.

“Thanks! However, I ought to be sorry for myself, too, just now. My good dinner is spoiled. I have no more wood for the fire, and the lamb is only half cooked. Never mind! In your place I’ll burn some other Marionette. Hey there! Officers!”

At the call, two wooden officers appeared, long and thin as a yard of rope, with queer hats on their heads and swords in their hands.

Fire Eater yelled at them in a hoarse voice:

“Take Harlequin, tie him, and throw him on the fire. I want my lamb well done!”

Think how poor Harlequin felt! He was so scared that his legs doubled up under him and he fell to the floor.

Pinocchio, at that heartbreaking sight, threw himself at the feet of Fire Eater and, weeping bitterly, asked in a pitiful voice which could scarcely be heard:

“Have pity, I beg of you, signore!”

“There are no signori here!”

“Have pity, kind sir!”

“There are no sirs here!”

“Have pity, your Excellency!”

On hearing himself addressed as your Excellency, the Director of the Marionette Theater sat up very straight in his chair, stroked his long beard, and becoming suddenly kind and compassionate, smiled proudly as he said to Pinocchio:

“Well, what do you want from me now, Marionette?”

“I beg for mercy for my poor friend, Harlequin, who has never done the least harm in his life.”

“There is no mercy here, Pinocchio. I have spared you. Harlequin must burn in your place. I am hungry and my dinner must be cooked.”

“In that case,” said Pinocchio proudly, as he stood up and flung away his cap of dough, “in that case, my duty is clear. Come, officers! Tie me up and throw me on those flames. No, it is not fair for poor Harlequin, the best friend that I have in the world, to die in my place!”

These brave words, said in a piercing voice, made all the other Marionettes cry. Even the officers, who were made of wood also, cried like two babies.

Fire Eater at first remained hard and cold as a piece of ice; but then, little by little, he softened and began to sneeze. And after four or five sneezes, he opened wide his arms and said to Pinocchio:

“You are a brave boy! Come to my arms and kiss me!”

Pinocchio ran to him and scurrying like a squirrel up the long black beard, he gave Fire Eater a loving kiss on the tip of his nose.

“Has pardon been granted to me?” asked poor Harlequin with a voice that was hardly a breath.

“Pardon is yours!” answered Fire Eater; and sighing and wagging his head, he added: “Well, tonight I shall have to eat my lamb only half cooked, but beware the next time, Marionettes.”

At the news that pardon had been given, the Marionettes ran to the stage and, turning on all the lights, they danced and sang till dawn.

火食い親方はくしゃみをしてピノッキオをゆるし、ピノッキオは友だちのアルレッキーノを死から救います。

劇場の中は、大さわぎになっていました。

火食い親方（これがほんとうの名前でした）は、とてもみにくい顔をしていましたが、見かけほど悪い人ではありませんでした。そのしょうこに、かわいそうな人形が、こわさにもがきながら「死にたくないよ！死にたくないよ！」と泣きさけんでつれてこられるのを見ると、かわいそうになって、まず気持ちがゆらぎ、それからだんだん心が弱くなっていきました。とうとうがまんできなくなって、大きなくしゃみを1つしました。

そのくしゃみを聞くと、それまでしだれやなぎのようにしょんぼりしていたアルレッキーノは、うれしそうにほほえみ、ピノッキオのほうに身をかがめて、ささやきました。

「いい知らせだよ、兄弟！火食い親方がくしゃみをした。これは、きみをかわいそうに思っているしるしなんだ。きみは助かったよ！」

というのも、ふつうの人は悲しいときには泣いて目をふくものですが、火食い親方は、悲しい気持ちになるたびにくしゃみをするという、ふしぎなくせを持っていたのです。それも、心のやさしさをあらわすやり方として、ほかのやり方とおなじくらいりっぱなものでした。

くしゃみをしたあと、火食い親方は、あいかわらずこわい顔のまま、ピノッキオにどなりました。

「泣くのはやめろ！おまえの泣き声を聞くと、このへんの腹のあたりがへんな気持ちになって……ハ……ハックション！……ハ……ハックション！」大きなくしゃみが2つ出て、言葉はそこでとぎれました。

「おだいじに！」とピノッキオは言いました。

「ありがとう！おまえの父さんと母さんは、まだ生きているのか？」と火食い親方はたずねました。

「お父さんは生きています。お母さんには、一度も会ったことがありません。」

「おまえをまきにしてしまったら、かわいそうな父さんはどんなに悲しむことだろう。気のどくなじいさんだ！かわいそうになってきたぞ！ハックション！ハックション！ハックション！」さらに3回、前よりも大きなくしゃみがひびきました。

「おだいじに！」とピノッキオは言いました。

「ありがとう！だが、今はわしも自分のことを気のどくに思わねばならん。せっかくのごちそうがだいなしだ。火にくべるまきはもうないし、子ヒツジはまだ半分しか焼けていない。まあいい！おまえのかわりに、ほかの人形を燃やすとしよう。おい、そこの！けいかんたち！」

その声で、木でできたけいかんが2人あらわれました。ロープのように細長く、頭にはへんてこなぼうしをかぶり、手にはけんを持っていました。

火食い親方は、しわがれ声でどなりました。

「アルレッキーノをつかまえて、しばりあげ、火の中へほうりこめ。子ヒツジは、よく焼けたのが食べたいんだ！」

かわいそうなアルレッキーノがどんな気持ちだったか、考えてみてください！あまりのこわさに、足がくにゃりとまがって、ゆかにたおれてしまいました。

その胸がはりさけるような光景を見て、ピノッキオは火食い親方の足もとに身を投げ出し、はげしく泣きながら、聞こえないほどのかぼそい声でたのみました。

「おねがいです、おなさけを、シニョーレ！」

「ここにはシニョーレなんかおらん！」

「おねがいです、親切なだんなさま！」

「ここにはだんななんかおらん！」

「おねがいです、閣下！」

「閣下」とよばれたとたん、あやつり人形劇場の座長はいすの上でぴんと背すじをのばし、長いひげをなでて、急にやさしく思いやりのある顔になり、ほこらしげにほほえみながらピノッキオに言いました。

「さて、今度はわしに何をしてほしいのだ、人形よ？」

「かわいそうな友だちのアルレッキーノを、どうかゆるしてやってください。アルレッキーノは生まれてから一度も、少しも悪いことをしたことがないんです。」

「ここにはゆるしなどないのだ、ピノッキオ。おまえは助けてやった。アルレッキーノがおまえのかわりに燃えねばならん。わしは腹がへっているし、ごちそうは焼かねばならんのだ。」

「それなら」と、ピノッキオは立ち上がり、パン生地のぼうしを投げすてて、ほこり高く言いました。「それなら、ぼくのやるべきことははっきりしています。さあ、けいかんさんたち！ぼくをしばって、あのほのおの中へ投げこんでください。いいえ、世界でいちばんの友だちのアルレッキーノが、ぼくのかわりに死ぬなんて、まちがっています！」

このいさましい言葉が、ひびきわたる声で言われたので、ほかのあやつり人形たちはみんな泣き出しました。おなじく木でできているけいかんたちまで、2人の赤ちゃんのように泣きました。

火食い親方は、はじめは氷のかたまりのようにかたく冷たいままでしたが、やがて少しずつ心がやわらいで、くしゃみをしはじめました。そして4回か5回くしゃみをすると、両うでを大きく広げて、ピノッキオに言いました。

「おまえはいさましい子だ！わしのうでの中へ来て、キスをしておくれ！」

ピノッキオはかけよって、リスのようにするすると長い黒ひげをよじのぼり、火食い親方の鼻の先に心をこめてキスをしました。

「ぼくもゆるしてもらえるのですか？」と、かわいそうなアルレッキーノが、消え入りそうな声でたずねました。

「ゆるしてやるとも！」と火食い親方は答えました。そして、ため息をつきながら首をふって、言いそえました。「やれやれ、今夜は子ヒツジを半焼けのまま食べなくてはならんな。だが、人形ども、この次は気をつけるんだぞ。」

ゆるしが出たと聞くと、あやつり人形たちはぶたいへかけていき、明かりをすべてつけて、夜が明けるまでおどったり歌ったりしました。

たんご と クイズ　第11章　くしゃみをする火食い親方

sneeze くしゃみ	**firewood** まき	**hats** ぼうし
swords けん	**beard** あごひげ	**squirrel** リス
nose 鼻		

Q1 火食い親方がくしゃみをするのは、どんなとき？

① 悲しい気持ちのとき　② おなかがすいたとき　③ おこっているとき

Q2 ピノッキオのかわりに火にくべられそうになったのはだれ？

① プルチネッラ　② アルレッキーノ　③ けいかん

Q3 「閣下」とよばれると、火食い親方はどうなった？

① もっとおこった　② ねむってしまった　③ 急にやさしくなった

こたえ

Q1 ①　ふつうの人は悲しいと泣きますが、火食い親方は悲しくなるたびにくしゃみをするくせがありました。

Q2 ②　火食い親方は「アルレッキーノをしばって、火の中へほうりこめ」と命じました。

Q3 ③　「閣下」とよばれた親方は、背すじをのばしてひげをなで、急にやさしい顔になりました。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #500（Carlo Collodi (tr. Carol Della Chiesa, 1909)、1883年）。パブリックドメイン。

挿絵：この本には挿絵がないため、場面をイメージして AI（Codex）で描いた絵です。

朗読（Web版）：Mark F. Smith（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）

和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。